

第1回「美しい四国づくり委員会」議事要旨

【挨拶+意見交換】

1. 横田局長挨拶

これまでの社会資本整備は、用・強・美のうち、用・強を優先してきた。
これからは、快適さ、心地よさを含む美しさについて、官・民の取り組みで育んでいきたい。
この委員会をきっかけに長く永続的な運動にしていきたい。

2. 梅原委員長挨拶

21世紀は、文明から文化の時代、地方の時代、観光・交流の時代といわれている。
四国は、歴史や文化、自然に恵まれている。
経済成長によって痛んだ箇所はあるが、今すぐに手を加えればよみがえる。

(「美しい四国づくりを目指して」スライド)

3. 意見交換

梅原委員長

「四国の魅力、美しさとは何か」と「どのような取り組みをすればよいか」の2つのテーマで意見交換をしたい。

木村委員

四国は大好きだ。
食べ物がおいしく、目・耳・口、全身で美しさを感じることができる。
瀬戸内の海は目線が水平で、期待感があり、山は見上げることによる祈りがある。
両方そろっている四国は安心、心の安らぎの四国といえる。
さらに、四国には88ヵ所巡りがあり、動きがある。これからは、歩くこと、動く映像が大切。裏通りを歩いて、楽しいか、住んでいる人の笑顔があるか、が大切。住んでよし、訪れて良しのまちづくり、地域づくりが重要。
高度成長期は若い男性のためのものだったが、これからは、女性、老人、外国人が満足する、おしゃれで、安心感があり、分かりやすいまちが良い。
「いらっしやいませ」といったよそ者扱いでなく、「ここはあなたの四国です」といった昔あった遍路道でのお接待文化が重要だ。そのために、観光施設と空港が大事になる。

石森委員

四国は大好きだ。

21世紀は「美しい」がキーワード。

「美しい四国」はじっくりくる。「美しい関西」ではじっくり来ない

四国には3つの美（自然の美、人工の美、人情の美）がそろっていてレベルが高い。今まで観光ビジターには評価されていないが、可能性がある。

20世紀は、旅行会社のパッケージツアーに代表される他律的観光の時代であった。

21世紀は、個人でインターネットなどで調べて出かける自律的観光の時代になる。地域も自ら立って、地域の資源を持続可能な形で活用して、自立的観光を推進する必要がある。

最近観光とは光を観るのではなく、幸せを感じる「感幸」だと言われることがある。

四国を訪れることによって幸福を感じる、四国の人も来訪者をもてなして幸福を感じるという双方における「感幸」が理想的だろう。

美しさとは、単に景観だけでなく、幸せを感じられるという心情的な面も重要だ。

四国にはその可能性がある。

福武委員

四国の美しさは、今まで注目されなかったから残っている。これからも、誰でも来てもらうような四国にはならない方がよい。

国土交通省は、風景を壊してきた。これまでの取り組み、考え方を大きく転換してほしい。社会資本整備が小さな親切大きなお世話ではいけない。

日本は経済的には世界第2位で豊かだが、観光客数は世界32位で、魅力がないといわれている。

地域の人々が生活をして長い時間かけてつくってきたものを数年で壊してしまった。

日本の原風景（コンビニのないところ）が残っているのは、四国の瀬戸内と越後妻有くらいしかない。

個性的な魅力は、民・個からしかつけれない。パブリックセクターは、個・プライベートセクターをどう支援できるかが重要だ。

これまでは「あるものを壊して、ないものをつくる」だったが、これからは「あるものを残して、ないものをつくる」ことが重要だ。

地方は東京にないものをつくらなければならない。地方でこそ、自分が主体になれる。

慎重に、世界に通用する美しさをつくらなければならない。安易に開発計画をつくってはいけない。

原風景には、現代美術を絡ませたほうが良い。なぜなら、進んだ若者を取り込めるし、またアーティストの作品に込めた現代社会の問題や課題、矛盾を訪れた人が受け止め、社会を変えていく主体者になっていくからだ。

日本を文化的に低くしたのは経済人の仕業である。利益をもっと地域のために還元しなければならない。

大西委員

これからは、人口が減少し、地域間で若者の獲得競争が起こる。

賑わいのある都市と心の安らぐ自然の両方の魅力を高め、居住地として四国を選んでもらわなければいけない。

そのためにも美しい四国づくりは重要。単に景観を良くするだけではだめ。地域づくりのビジョンが必要。この委員会の成果を国土計画に反映してほしい。

木内委員

8月に四国に赴任。今まで1，2回しか来たことがなかったので、現在四国の勉強中。

主として東京、横浜に勤務していたが、ここに来る前は神戸に2年いた。他の地域に教わることが多いと感じる。

横田委員

「美しい四国づくり」では、国土交通省は前に出ず、住民やNPOが主体にやっていただきたい。

まち並みの統一性の誘導など、地域の個性が強く、住民の意識が高くないといけない。先進的で、手をあげたところをもっと引っ張り上げ、リードする地域を作りたい。

また、これまでのコンクリート主体の社会資本整備については、われわれで改善できるため、やり方について、ご意見・ご指導いただきたい。

楠瀬委員

個人的に浦戸湾の景観を守るNPOの活動もしている。

美しいとは、五感に訴える「揺らぎ」があり、感動することだ。自然と人工的なもの、有形のものと無形のもの、それぞれの美しさと相互のバランスが大切。

景観の創造と維持については、企業、民（個人、地域）、官が協働する仕組みを作り、それぞれの意識を高めることが大切だ。

岡田委員

昨年6月に松山に赴任。それまでは9割は東京など東国にいた。

四国の美しさは、歴史に根ざす自然と風土のあいまった美しさだと思う。

「里山」という番組は人間も生態系の一部といった視点でつくった。

人間と自然のキャッチボールが現在の風景をつくっていると考える。

昨年大洲で開催されたまち並み博で、軒先につられている竹細工が「かんかん」と音を奏でるのを聞き、音も大事なキーワードだと知った。

多くの人と話すが、地域の人ほとんど考えている方向性は同じ。だが、具体的なことはなかなかひとつになりにくい。

また、航空運賃が高くて四国が遠く感じられることも変えていきたい。

井原委員

四国の魅力は、ヒューマンスケールの地域の持つ美しさ、その美しさを実現できる潜在力だと思う。

これからはヒューマンスケールが大切で、そうだとすれば空間的、物理的な美しさだけでなく、感性に訴え、心を豊かにするような幸せ感のあふれる地域でありたい。穏やかで明るい四国にはそれがある。

これからは、開発や新しく作るのではなく、潜在的にある地域資源から個性を見出し、地域の人々の営みや思いをブラッシュアップして見せることが大切。

梅原委員長

四国の現状を踏まえて、どう取り組んだら良いか？

石森委員

今なぜ「美しい四国づくり」か、と考えると、これがこれからの四国にとって生命線であるからだ、といえる。いかに自律的観光を効果的に推進し、交流人口を増加させるか。

美しいものをつくるには長い時間がかかる。短期的、中長期的戦略を仕分けして考えるべき。

4県別々の方向を向いているが、観光振興ではある程度まとまったほうが良い。民・産・官・学の連携をいかに図るか、が問題だ。

大西委員

四国電力では、各地で景観保全の取り組みを行っている。（高所作業車を使った坂本龍馬像等の清掃や高木の剪定など）

梶原町では電線電柱類を表通りから裏通りへの移設を検討している。

井原委員

学としての人材育成として、地域に根ざし中核となる人材を育てたい。
そのために、地域固有の実態を徹底的に洗い出す教育プログラムを実施している。
マーケティング、マネジメント等を通して、東京と四国の比較、他の地域を比較し、地域固有の価値を見出すことで、地域の美の公共性、共通認識を作り上げていきたい。

木内委員

運輸局は公共交通と観光振興を柱として進めるが、美しさを破壊しないような努力をする。

ドイツ(ハンブルグ)での滞在経験から美しい町並みなどを保つのは、PR とともにある種の厳しい規制が必要と感じた。

横田委員

地域の魅力、個性をどうやって作るか、継続できる仕組み、動機付けをどうやってつくるかが課題。

また、プロデューサー等の人材を如何に育てるか、良質な投資をどうやって呼び込むか、も重要な課題だ。

岡田委員

具体的にひとつの大きな歯車をまわす動きをつくりたい。

楠瀬委員

個人の敷地は個人のものという意識が強い。景観的には公のものであるという意識をいかに高めるかが課題。

福武委員

具体的モデルを作っていく、四国全体に広げることが良い。

木村委員

四国の人に美しさについての共通認識が少ない。山の緑は美しい。それだけに白っぽいまちでは緑化を進めることが良い。物ではなく、幸せを売るまちが良い。梶原には隈研吾設計の良い宿泊施設がある。西欧では、田舎に高級なものを作り、車を村の中に入れてない知恵と工夫がある。技術文明と一線を画すタメになる楽しさ、知恵が求められている。

今の四国に足りない要素である知的な楽しみを生むため、大学教授とか大学院生

による観光ガイドもひとつの方法だ。ヨーロッパに実例がある。
具体例を進めるのが良い。